

竹島先生、ありがとうございました

峯 正志

私が広島大学の言語学科に入学したのは昭和 54 年でした。言語の学生は二年生のときに古典語を取ることが必修となっていました。他の同級生は皆ラテン語を取る中、私は一人だけギリシア語を選び、竹島先生の授業を受けることになりました。このことが契機となり、学部 3 年の時には古浦敏生先生のホメロスの授業を受け、結局卒論はホメロスの二重対格について調べることになりました。先生の研究室を訪れ、貴重な図書を貸していただいたことを覚えています。

古典語を学部のとときにしっかりやったことは、その後大学院でシュメール語を勉強するのに役立ったと信じています。(大学 3 年生のときに、吉川守先生に「シュメール語を将来勉強するためには、いま何をしておいたらよいでしょうか」と聞いたことがあります。そのときの先生の答えは、「古典語をしっかり勉強しておきなさい」というものでした。)

竹島先生の授業では、ギリシア語の曲用、活用、本文などが先生のよく通る声で朗々と読まれます。私たちは弱々しい声で続いて読みます。このようなことが古典語の勉強に必要なのだろうかとは当時は思っていたものですが、その威力を 18 年後に思い知りました。

現在奉職している金沢大学で、古典語を教えていらっしやったある先生が 1 年間イギリスに留学することになり、その代わりに 1 年間引き受けて、アナバシスを学生と一緒に読みました。18 年間全くギリシア語を勉強しておらずさび付いていたので、思い出すのに相当苦勞するだろうと覚悟していたのです。ところが、読み始めてみると先生のあの声が頭の中に響いてきます。パース、パントス、パンティ、パンタ……。パイデウオー、パイデウエイ、パイデウエイ……。基本的なことはだいたい頭に残っており、学生時代のようにすべての語を辞書で確認することはしなくてすみました。若いときに、目、口、耳

を総動員して覚えたことはなかなか忘れないということでしょうか。私は音読の力を再確認しました。

当時のギリシア語の授業は受ける人が少なく、後期になると2~3人のこともありました。テキストは田中・松平の『ギリシア語入門』で、これには各課和訳10題、希訳5題、合計15題の練習問題があります。毎回きっちり3課進みますから、45題の練習問題を2~3人で答えるのは大変でした。誰かがやっていないと一人でほとんど答えることになります。授業の前日は夜遅くまで予習で大変だったことを覚えています。今となっては懐かしい思い出ですが。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。